



Title	現代日本語における空間的な関係を表す表現の 意味用法と機能語化 一意味機能の広がりにおける関連性を中心に一
Author(s)	張, 希西
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (張希西)	
論文題名	現代日本語における空間的な関係を表す表現の 意味用法と機能語化 —意味機能の広がりにおける関連性を中心に—
論文内容の要旨	
<p>本論文は、現代日本語における空間的な関係を表す表現について、自立語「うえ」、自立語「うち」、語構成要素「上(じょう)」と「上(じょう)」を後要素とする語「一上」、「事実上」といった表現を対象に、各表現の意味機能を記述、分析し、その意味機能の広がりにおける関連性を明らかにしたものである。</p> <p>空間表現の各意味用法の連続性については、認知言語学の視点から考察するものが多い。この立場は意味間の繋がりを説明するのに有効かもしれないが、各意味機能の間の関連性を説明するにあたり不十分なところがあると考えられる。本稿では、通時的な派生または共時的な拡張の方向を考察するのではなく、現代日本語における空間的な関係を表す表現が、それぞれどのような意味と用法を持っているか、いかに空間的な関係を表すものから、文において、または文を越えて、抽象的、論理的な関係を表すものになることができるかという疑問を念頭に置き、以下のような点に注目し、各意味機能の間の関連性を考察した。</p> <p>①空間的な関係を表現の意味と用法に影響する要素 ②これらの表現の具体的な用法ごとに、いかに具体的な位置方向などを表す意味を反映させ、接続表現として用いることができ、また、繋がりを持つと考えられるそれらの意味と用法にどのような関連性があるのか ③各表現によって関連付ける事物や事態の間の「関係」のあり方、各「関係」の共通点と相違点 ④同じく「空間的な関係を表す表現」として、各表現の間にどのような共通点と相違点があるか</p> <p>空間的な関係を表す表現の各考察対象について、明らかにしたことは以下のとおりである。</p> <p>(1) 自立語「うえ」(第1章)</p> <p>現代日本語における「うえ」は多様な意味用法を持ち、その意味用法は共起する要素、特に前起する要素に大いに影響される。本稿は「関係」を検討するため、前後の両要素とも存在する場合を中心に考察した。</p> <p>空間的な関係を表す表現としての「うえ」が、その意味用法を広げ、接続表現のように機能することには、可能性とある程度の必然性があると考えられ、その理由として両方とも「関係」を示す表現として機能することを挙げた。「うえ」は「要素A+うえ(で/に/から……)+要素B+述語」のように、2つ(あるいは2つ以上)の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法を持つ。これに対し、接続表現は前件を受け、後件に引き継ぐような働きを有し、前件と後件の間の論理的な関係を表す。要素の種類によって「うえ」の意味用法は異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すというところに共通点があると考えられる。</p> <p>また、「うえ」の各意味機能に、共通点が見られるのは、「うえ」が関連付ける要素と要素の間の関係のほか、共起する要素の種類、性質と関わる「うえ」が「ある側面の前面化」と「先行条件」という意味を持つためである。「うえ」の意味用法の広がりには2つの意味の競合(潜在的な意味か顕在的な意味か、優位に立つかどうか)が見られる。</p> <p>更に、今後より詳しく考察する余地があるが、節や文が前起する場合、「うえ」が関連付ける要素と要素は、空間的な関係と時間的な関係にも関わり、それぞれの要素の性質によって、要素間の時空関係が異なると考えられる。</p> <p>(2) 自立語「うち」(第2章)</p> <p>「うち」の意味も共起する要素に影響される。要素Aと要素Bが揃っていることを前提に、「うち」は前起要素で示すある空間的な側面・範囲、時間的な範囲、抽象的な範囲あるいは部分が所属する全体の範囲を前面に出し、後続要素と関連付け、その間の空間的な相対位置関係、相関関係あるいは所属関係を示す。その各意味機能の関連性は、「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方と「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方に見られる。「要素A+うち」が表す「範囲」は用法によって異なる性質を持つと考えられることから、両者を分けて見る必要があることを主張し、「範囲の設定」と「範囲の限定」に分け、説明した。</p> <p>「うち」が空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲を表す場合、「要素A+うち」は述語の補語のようなものであり、後続する事物との空間的な相対関係に関わる場所などのような条件として、あるいは述語で表す事態の時間的な先行条件として前面に出る。これを本稿では「範囲の設定」と提示する。</p> <p>前起要素の種類と関わらず、「うち」が、部分の所属する全体の範囲を表し、「要素A+うち」は後続内容で示す事態全体と関わる範囲ではなく、要素Aの下位のものに該当する後続内容の一部(主体、客体、あるいは時間など)を規定する範囲である。これを本稿では「範囲の限定」と提示する。</p>	

節や文が前起する場合、「範囲」を示す「うち」の前起要素は、存在している状態や持続している動作、時間的に幅を持つ動作及び一定の時間内で反復性を持つ動作を表すものであるという傾向が見られる。この点は、動詞の分類と関わる前起要素のあり方として、より詳しく検討する余地があると考えられる。

(3) 語構成要素「上(じょう)」と「上(じょう)」を後要素とする語「一上」(第3章)

語構成要素「上(じょう)」は、具体的な意味を表す前要素と結合する場合、「ある側面において」という意味を表し、述語の補語として、述語で示す動作、状態などの具体的な場所を前面に出し、話し手/語り手の叙述として示す。また、抽象的な意味を表す前要素と結合する場合、後続する話し手/語り手の判断、認識を出す条件、立場を前面に出して示すことで、話し手/語り手の主観的な事態把握を表していると考えられる。結合要素の種類と前後文脈によって、「ある側面において」「ある側面から見ると/言う」という意味を表す「一上」は前面に出され、後続する内容に先行する条件として働く。

「上(じょう)」は前接要素の拡大を伴って生産力を増し、接尾辞化し、抽象的な側面・範囲という意味を表すようになる。その前接部分は語の内部のみならず、語を越えて句まで拡大し、それによって、接尾辞「上(じょう)」が前接要素とその修飾部分を包み込む「句の包摂」現象が見られる。

「上(じょう)」は、抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する場合、副詞のように振る舞うことが多い。しかし、修飾成分が必要かどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「一上」が接続助詞的、接続詞的に機能することがある。

「上(じょう)」の前接要素自身で完全な意味を表すことができない場合、その意味内容を補足するための修飾部分が必要となる。この修飾部分が前文または前文脈にあり、「一上」は単独で使用され、先行内容から後続内容に引き継ぐ機能を果たす。このような機能の移行は、語彙的な意味が残っている前接要素と、「上(じょう)」が結合して構成した「一上」が先行内容と後続内容の意味的關係に影響を与えることに起因すると考えられる。「一上」が後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように振る舞うと考えられる。

(4) 「事実上」(第4章)

「事実上」は副詞として働く場合と接続詞のように振る舞う場合があり、また、談話のレベルにおいて、談話標識に近づく場合もある。これらの用法の間には関連性はあるものの、はっきりとした境界線がなく、「事実上」の機能はそれが働く具体的な言語環境によって多様な側面を持つ。

文中で副詞として働く「事実上」は、述語を修飾するものとしても、文全体を修飾する文副詞としても、「(前述した内容を踏まえて)事実という側面から見ると/言う」という意味を表し、後続内容で表す話し手/語り手の判断、認識が示される条件として前面に現れる。また、接続表現と共起し、前後内容との相反の關係、または相関の關係を強める役割を果たす。

接続詞のように振る舞う「事実上」は、「事実という側面から見ると/言う」という意味を表し、前後の内容を関連づけようとする話し手/語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きを持つ。

「事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表し、前後の一貫性に関わって働く。

「事実上」と意味的に共通点を持つ表現として「事実の上」が、機能的に共通点を持つ表現として「事実」があるが、「事実上」はこれらと違う性質をも持ち、「事実の上」と「事実」には見られない、談話標識に近づく一面を有している。

以上の内容を踏まえ、現代日本語における空間的な關係を表す表現の意味機能には、意味と用法に影響する要素、各表現が関連付ける要素間の關係のあり方、各意味機能に見られる関連性、及びその関連性と関わる現象のような点において、関連性と共通点が見られると考えられる。

また、以下のような内容について、更に詳しく考察する余地があると考えられるため、今後の課題として示す。

- ①動詞の性質と関わる要素間の空間的な關係、時間的な關係、名詞が前起する場合における要素間の時空關係。
- ②節や文が前起し、「うち」が前起要素と共に時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表す場合における、動詞の分類と関わる前起要素のあり方。
- ③空間的な關係を表す語構成要素を後要素とする語について、「一上」のほか、「句の包摂」現象が見られるものの考察。
- ④日本語における「事実上」、中国語における「事実上」に関する対照考察、及び両言語における「一上」全般に対する対照考察。
- ⑤「うえ」と「した」、「うち」と「そと」のような意味的に対となる空間的な關係を表す表現の対照考察。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (張希西)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	田野村忠温
	副 査	大阪大学 教授	石井正彦
	副 査	大阪大学 教授	三宅知宏
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 現代日本語における空間的な関係を表す表現の意味用法と機能語化
—意味機能の広がりにおける関連性を中心に—

学位申請者 張希西

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	田野村忠温
副査	大阪大学教授	石井正彦
副査	大阪大学教授	三宅知宏

【論文内容の要旨】

本論文は、現代日本語における空間的位置関係を表す「うえ」「うち」「上（じょう）」などの言語形式の意味用法の拡張に関する考察である。以下においては、空間的位置関係を表す言語形式を便宜上「空間形式」と略称する。

本論文は、序論、本論、結論の3部より成り、序論は3章、本論は5章に分かれている。序論の前に置かれた要旨などを除くと、参考文献などを含めて121ページ、400字詰め原稿用紙に換算して約300枚の分量である。

序論では、本論文の問題提起と研究目的、先行研究の概要と本論文の立場、考察の対象と方法が述べられている。本論文は、「現代日本語における空間的な関係を表す表現が、それぞれどのような意味と用法を持っているか、いかに空間的な関係を表すものから、文において、または文を越えて抽象的な、論理的な関係を表すものになることができるか」という疑問を念頭に置き、(中略)これらの表現の意味機能の広がりにおける関連性について究明することを目的とする。そして、空間形式の意味用法に影響する諸要素や、本来的な意味用法と拡張的な意味用法のあいだの関連性などに注目して考察することが述べられる。

本論「第1章 自立語「うえ」の意味用法と機能」は、本論文に挙げられた文例によれば、次のような「うえ」の意味用法の拡張の考察である。

机のうえに本を置いた。

→ 仕事のうえで、大きなミスをした。／すべての条件を承知したうえで、契約を結んだ。

同「第2章 自立語「うち」の意味用法と機能」は、次のような「うち」の意味用法の拡張の考察である。

芝居じみた混乱のうちに、基一郎は玄関の内に運ばれた。

→ 五年間のうちに、私は何度か転居していた。／アイデアを求めているうち、しだいに案がまとまってきた。

同「第3章 語構成要素「上（じょう）」の意味用法と語「一上」の機能」は、次のような「名詞＋上」の形の表現の意味用法の拡張の考察である。

僕は乗降台からプラットフォームと反対側の線路上に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被

さった。

→ 特色ある学校づくりは教育上大きな効果がある。／従来は、上告を比較的無制限に許して、だからこそ三審制だったのだが、現在では、かつて「まだ最高裁がある」といわれたような状況はすでになくなってしまっている。事実上、日本はいま二審制なのである。

同「第4章 「事実上」の意味用法と機能」は、第3章で扱われた「一上」の一例である「事実上」に特化した考察で、「事実上」には「副詞として働く場合」と「接続詞のように振る舞う場合」とがあると、両者の相互関係について述べている。

同「第5章 関連性と共通性からみる空間的な関係を表す表現」はそれまでの各章で述べられた内容を全体的な視点から確認した短い章である。

結論の部では、論文全体の総括と今後の課題が述べられている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、現代日本語の空間的位置関係を表すいくつかの言語形式の意味用法の拡張の様相を実際の多数の用例に基づいて観察し、その拡張のメカニズムについて考察したものである。

非母語学習者の立場から、日本語の空間形式の意味用法の広がりを考え、拡張を支える原理の解明を目指したものであり、考察の対象とされた空間形式の範囲が限られてはいるが、それらに関わる意味用法の拡張の種類とパターンの整理は、今後日本語非母語話者による日本語研究や日本語教育に有益な知見を提供する可能性が期待される。

ただし、審査の過程ではいくつかの大きな問題点があることが指摘された。その主なものを挙げれば以下の通りである。

- 1) 全体に論述の明晰性が足りず、論旨を追いづらいところが多い。用語や概念の使用がしばしば不正確で、主張の論証も不足気味である。論文題目に「機能語化」とありながらその議論がないといった問題もある。
- 2) 空間形式の前後の要素やその相互関係に関する議論だけで、当の空間形式自体に対する考察がない。そのため、「うえ」が何を表すのか、「うえ」と「うち」がどう違うのかといったことが分からない。
- 3) 空間形式の意味拡張は文法的な側面とも関わり合うが、文法的な観点からの考察が乏しい。例えば、「(～する)うち」と「(～する)うちに」とでは意味用法上差があるが、そうした事実の考察はない。
- 4) 著者自身の考察の方法に合わない理論、手法を正当に理解しない状態で、それに問題があるかのように安易に批判して退けている。

このように、本論文は高い水準で評価すれば多くの改善の余地を残すが、著者が従来研究の多くない日本語の空間形式の意味拡張の問題に着目し、年月を費やして考察の努力を重ねて達成できた成果であり、著者が本論文を足がかりとして今後いっそう高い次元の研究を展開するための出発点と考えることは可能である。

よって、本論文を博士（文学）の学位を授与し得るものと認定する。